

都市計画学会シンポジウム 水口基調講演の「枕」

181117 15:40-16:10

1. 初めに少し個人的な話を「枕」に

- 線引き制度ができた1968年に私はドクターコースの1年。その頃大学闘争もやっていて活動が多様化したが、プランナー仕事と研究活動は新都市計画法と並行してきた。
- その後の都市の大転換の中で、線引き制度は社会への適合を怠ったまま、ゾンビのような存在に。
- このシンポの企画者の一人である桑田さんから今回のオファーを受けた時、私の仕事上の「遺言シリーズ」の節目と思って即座に引き受けた。
- 「遺言」というのは、「自分たちの世代で解決し損ねた課題を、次の世代に押し付けるもの」という意味。

2. テキストについて

- 私の話は、線引き制度の改革という古典的なテーマに相応しく、古典的な紙テキストによるプレゼンで。
- 進行の内海さんと20分台で終わらせると約束したので、本文の7章構成の1章当たりおよそ3分で。
- ゴチックで強調した部分を拾いながら概要を説明して、あとのパネルディスカッションのタタキ台になればと。
- なお、テキスト中の文字の小さな部分は補注や引用に関するもので、今回のプレゼンではその多くを割愛する。